

戦争を語り継ぐ会に参加して

栄 平瀬敬久

さる8月26日、坂戸駅前集会施設において「戦争を語り継ぐ会」に参加しました。私は、既に過去何度もこの語り継ぐ会に参加していますが、司会の岩渕さんの説明で今回初めて、なぜ8月と12月に開催しているのかを知りました。8月の開催は何となくわかる気がしていましたが、やはり終戦（敗戦）の月だからでした。そして12月は日米開戦の月であるため、ということを知りました。年2回の開催ということは把握していましたが、8月以外は不定期かどうか把握していなかったため、なるほどと思いました。

そして、今回、語りついでくださるのは元町の関口久美子さんと石井の松本仁さんです。関口さんの話は85歳になるお母さまから聞いた話です。この会が「語り継ぐ会」であることを考えると、非常にこの会の趣旨に沿ったものと考えます。

私は今年、8月初めに広島での開催された原水爆禁止世界大会に参加しましたが、そこでも「被爆者の高齢化が進む中で、いかにして高齢者の話をこれからの世代に引き継いでいくかが大きな課題」ということでした。そして被爆2世の方々や、被爆者から話を聞いた方が語り継いでいく取り組みも始まっています。そうしたことから、今回の「戦争を語りつぐ会」で、お母さまから聞いた話を語るということは新たな取り組みであり、素晴らしいと思いました。

日米開戦時、お母さまは9歳。そこから話は始まり、戦時中の家庭や学校での生活、終戦時の状況、そして戦地から戻ってきた二人のお兄さんの話、と続きます。ここで思ったのは、その記憶の正確さ、そしてそれを私たち、会の参加者へ正しく伝えようとする久美子さんの語り。おそらく何度も話の内容をお母さまに確認されたのだと思います。

さらに久美子さんの話は、ご自分のご主人のお父様が南方に出征された際の戦地からの手紙の話や、息子さんが学校の平和教育の一環として沖縄へ修学旅行に

行った際の平和資料館やガマ見学時に感じたことが記された感想文にも触れています。

これらの話で感じたことは、「戦争を語り継ぐ」とは、その話をしてくれた方（戦争体験者）の話を100%は無理だとしても、できるだけ正確に語り継ぐことが大事なのだと思います。正確に伝えることで、その現実味も増し、話を聞く相手にもその生々しさが伝わるのだと思います。

私も先ほど触れた原水爆禁止世界大会で「被爆の実相」を聞く分化会に参加し、被爆者の話を聞きましたが、それを参加報告書にまとめるにあたっては、聞いた話をできるだけ正しく正確に記載することに心を砕きました。今回、関口さん（久美子さん）が「語りつぐ会」での講演を引き受けられるにあたり、お母さまに十分に話を聞かれ、いろいろ調べて入念な事前準備をし、この会に臨まれたことに敬意を表したいと思います。

講演後に戦時中の入西小学校でのお母さまのクラス写真を見せていただきましたが、今とは全く感じの違う、でもどのあたりで撮影したのかわずかにイメージが湧く入西小学校校庭の写真には感動しました。

そして次は、松本仁さん。77歳（1941年6月生まれ）、静岡県藤枝市出身、東京荏原、静岡育ち、そして現在は坂戸在住36年、とのこと。空襲時に防空壕に飛び込んだ話や、その記憶から今でも夜のプロペラ機の音は気持ち悪くなる話、防空壕にホテルを放して明かりの代わりにした話や、終戦時の玉音放送の話。

それから戦後の食糧難の話や、DDT散布の話。小4の頃、映画教室で鑑賞した「原爆の日」の記憶。戦後8年経った小6の修学旅行時、上野で見た自分と同じ年代の浮浪児の記憶、最後は平和を願う気持ち、9



戦争を語り継ぐ 子や孫の時代へ

日時 12月9日（日曜日）13時30分から16時
会場 坂戸駅前集会施設（2階）会議室1
内容 勤労働員で飛行機を 泉町 田中一枝さん
9条への思いや話し合いなど

条を守る大切さに触れ、締められました。

終戦時はまだ4歳ですから、やはり記憶が断片的で、その断片的な記憶をつなぎ合わせながら、戦後の記憶やその頃に見た映画も絡めて、現在のテレビ放送（映画やドキュメンタリー）も交え、そして現在の日本の状況にも触れながら語られました。

私の母は、1942年11月生まれの75歳です。DDTの話など、松本さんの話は母からかつて聞いた話とダブる点もいくつかあり、同じ世代なのだと感じました。小学校の頃、母に聞いた話を思い出し、（明るい内容ではないわけですが）とても懐かしく感じました。

今回の「戦争を語りつぐ会」に参加してよかったと感じましたし、機会があれば、またお二人に話を伺いたいと感じた今回の「語り継ぐ会」でした。

いま、戦後世代が「戦場体験」を受け継ぐということ(3)

戦争研究者 遠藤美幸

4. 聞き取りや史料から何がわかるか？

(1) 小林憲一（第33軍配属飛行隊長）1985年6月22日、JL006便での出会い（65歳）。

- 1944年7月～8月に拉孟陣地に食糧・武器弾薬の空中投下を敢行。
- 軍参謀辻政信から「拉孟を救援することはもうできない」と聞かされる。
- 食料や武器弾薬以外に、戦功を讃える「感状」を投下した航空部隊もいた。2009年に死去（享年89歳）。

(2) 木下昌巳（拉孟守備隊野砲兵中尉）全滅前に金光守備隊長から脱出命令を受ける。

- 全滅直前に拉孟陣地を脱出し、奇跡的に龍陵の歩兵団司令部に辿り着く。
- 木下の証言から、拉孟守備隊は戦闘開始から1週間で劣勢、悲惨な戦闘の実像が判明。
- 公刊戦史の記述とは？「完全に敵の攻撃を粉砕」、「勇戦敢闘」と記されていて、木下証言と異なる。文末に、壮絶な戦闘の末、軍上層部からの個人感状で讃えている。
- 「俺と一緒に死んでくれ」（全滅前日）「生き残ってしまって申し訳ない気持ちでいっぱいだ」戦後、遺族を訪ね歩く。2013年死去（享年92歳）

(3) 関昇二（拉孟守備隊野砲兵中尉）関山陣地名は当時の中隊長の関の名が付く。

- 陣地構築時の拉孟守兵、全滅戦には参戦せず。戦友会代表世話人（享年99歳）。

(4) 黍野弘（第33軍参謀少佐）ビルマ方面軍第33軍の後方参謀

- ビルマルート遮断作戦を辻政信作戦参謀と共に策定。
- 戦後は新古事記研究会を主催（2003年から2008年

まで参加）

- 「辻政信も私も断作戦は成功するとは思っていない」「いくさは、一度起きたらやめられない。軍参謀なんかにはやめられるわけがない」。2008年死去（享年90歳）。

(5) 早見正則（拉孟守備隊歩兵上等兵）守備隊本部の通信兵。現在95歳。

- 全滅戦後、捕虜となり昆明収容所に収容。「慰安婦」や戦場の実像を赤裸々に語る。
- 「慰安婦は『战友』」「拉孟は食糧事情が悪く、タンポポみみたいな草を、缶詰の缶を鍋の代わりにして湯がいて粉末の醤油や岩塩を混ぜた『拉孟汁』を食べた」
- 「米国で開発された中国軍の新型兵器・火炎放射器の物凄さで多くの兵が犠牲になり、その凄惨さは筆舌をつくすことはできない」
- 「壕の中は膝まで泥でぬかるんでおって、敵の砲弾がすごくて頭をだすこともできんから、用便をするのも砲弾の薬莖を空き缶にして壕の外に放り出した」
- 脱出将校の木下昌巳中尉を戦後も批判（将校嫌い、兵科の確執）

(6) 平田敏夫（第53師団歩兵二等兵）龍陵戦（拉孟守備隊救援作戦）に参戦。

- 2012年、平田と雲南戦跡を巡る旅をする。2017年8月死去（享年93歳）。
- 1998年11月、雲南戦場を戦った元兵士と遺族らにより龍陵に白塔小学校を寄贈。
- 龍陵北西部の白塔村ではスパイ容疑で日本軍による住民虐殺（反日感情が強い地域）

(7) 朴永心（拉孟の「慰安婦」）全滅後は、捕虜となり昆明収容所に収容。

- 1921年、朝鮮人民共和国平安南道南浦市の貧農の生まれ。
- 1939年8月、ある洋品店の下女奉公先で、店に現れた日本人巡查に「お金が稼げる仕事があるが、お前も行かないか」と誘われた。憲兵に平壤駅で引き渡された朴ら十数名の娘たちは、貨車とトラックで南京まで連行され、最初に南京の「キンスイ楼」という「慰安所」に入れられ、「19」番が彼女の部屋となる（歌丸）。
- 1942年初夏、ビルマのラシオの「慰安所」に連行され、1943年6月頃、拉孟に連行（若春）。陣地脱出時、妊娠中でその後切迫流産（死産）。2006年死去（享年85歳）。

【米国史料による「慰安婦」の記録】

「昆明収容所に25名の朝鮮人のうち23名が女性で、全員「慰安婦」であった。この報告書の中の朝鮮人捕虜名簿に、朴永心の名前、年齢、出身地、連行年月日が記載。

「パク・ヨンシム、23歳、平安南道出身、1939年8月、朝鮮を出る」

「彼女たちは、明らかに、強制的に、また騙されて慰安婦になった。例えば、1943年7月に朝鮮を出た15名は、朝鮮の新聞広告でシンガポールにある日本工場の女子労働者の広告に応募した。同様の誤解で、少なくとも300人の少女たちが南方に送られた」と記載（米国公文書館の「連合軍捕虜尋問報告書」）

5. 拉孟戦と「慰安婦」の女性たち

【日本軍上層部による「慰安婦」観とは？】

野口軍参謀（1942年末裏山陣地に「慰安所」設置）

「部隊長の粋なはからいで、陣外の片すみに慰安所も設置されて、潤いのある生活も与えられるようになった。」（野口省己『回想ビルマ戦記』光人社、1995年）

辻政信参謀の「慰安婦」美談【ねつ造】

全滅時の壕の中で、「日本人慰安婦は晴着の和服に最後のお化粧をして青酸カリをあおり、数十名一団となって散り、朝鮮娘5名だけが生存」（辻政信『十五対一』酣火社、1950年）

【日本軍兵士たちが語る「慰安婦」とは？】

早見上等兵証言

「昆明の収容所におったときなんか、若春さん（朴永心）はよく面倒みてくれて、洗濯などしによく来てくれました。…若春さんは日本語も日本の歌もうまくて、よく流行歌を歌ってくれました。とても朗らかで気分の良い人でした。本当にようしてくれました」「あの娘たちも「戦友」である」

森本上等兵手記

昆明収容所で、「彼女たちとよく四方山話をした。彼女たちはよく私のテントに遊びに来てくれた。…話が始めると、矢張り拉孟の話でもちきりである。お互いに、長い、長い、苦闘の日々であった拉孟の思い出は、いくら話してもつきなかつた」

鳥飼一等兵の手記

衛生兵だった鳥飼一等兵は、「慰安婦」らとは定期健診などで接する機会があったため、慰安所について幾つかの情報を持っていた。「慰安所には男の抱え主が二人いて、慰安婦は20人くらい。日本人は熊本の遊郭から来た者もいたが大半は年増でモヒ患者もいて暴れ出すこともあった。朝鮮人は若くて綺麗な子ばかりだったが、そのうちの一人が子供を産んで龍陵に替わったから拉孟では死なずに済んだ」

吉武伍長の手記

吉武伍長は、平時の拉孟で、軍医に付いて性病検査の手伝いをしていた。「ほとんどの慰安婦が淋病だったので、毎日よく注射をしてやった」と言う。性病の薬も一応揃っており、梅毒の特効薬のサルバルサンもあった。

小林飛行隊長の証言

「拉孟陣地に、武器・弾薬・食料の空中投下をする

際に、眼下にモンペ姿（軍袴）の数人の女性が白い布を打ち振る姿に驚き、目が釘付けになった」

【中国人ジャーナリストの証言】

「戦後、朴永心さんは、南京の慰安所跡の訪問時、フラッシュ・バックで取り乱した」（トラウマ、慢性のPTSD（心的ストレス障害））。抵抗したために軍刀で切られ首筋に傷が残る。妊娠していたが、全滅時死産し、子どもが産めない身体となる。

【日本人に言わない（言えない）本音】

元日本兵と朴永心の証言のギャップ！

「彼らは日本人、私たちは被害者、なぜ同じ牢屋へ押し込められるのか」「私は人生のすべてを失った。恥ずかしい。自殺したい」

【85歳で永眠した朴永心の死亡記事】（「朝鮮新報」2006年8月7日）

「17歳の乙女が、植民地支配下の故郷、南浦から、日帝の官憲に騙されて、戦場の『慰安婦』として駆り出されていくまでの運命の暗転。朴さんはこう語っている。

砲弾の嵐の中で、屈辱に満ちた生活を送り、幸運だったのか悲運だったのか、私は死線をくぐり抜けて生き延びてしまった。故郷に帰ってからも当時の記憶に苛まれて、まるで罪人のような気持ちを抱えて生きてきた。悪夢に襲われ、人々に過去のことを知られまいと隠し通し、耐え難い苦痛を抱えて生きてきた私の一生は、一体何だったのか。

6. 長年の「戦場体験」の聞き取りから学んだこと

※長期的かつ継続的な信頼関係の構築がベース

(1)なぜ「戦場体験」の継承が必要か

「戦争体験」と「戦場体験」の違い、戦闘員であるか否か？ 加害性と切り離せない「戦場体験」にこそ、戦争の「本質」がある。

(2)話したくないこと、話せないことに戦場の「本質」がある。

上官に、遺族に、男性（女性）に、家族に、日本人に。戦時性暴力、野戦病院の惨状、シタン河の白骨街道…。

(3)多面的で複雑な戦場体験から学ぶ

元兵士の証言の矛盾やねじれ、戦友会でも話せない話、生い立ち、戦闘時期、場所、階級、兵科、敗戦の迎え方、戦後の生き方の相違、いつ、どこで、誰が、誰に、何を、どのように語るのか？（続く）

13周年のつどいの感想から(3)

◆ 「戦場体験」を語ってもら（聞き取る）という一番困難なことに長年取り組まれたことを本当にありがたいことだと思いました。

今後、さらに残された事があれば、詰めていただいてほしいです。

ただ、「証言」が全て、当時の事実であるかは、なかなか難しいです。傍証で、その真偽が証明できれば良いのですが、当時の資料が殆んど失われているところが、難しいです。

連合軍側の資料も必要ですがプロパガンダ的な場合もあり史料批判を通じて積み上げていく困難が伴います。

遠藤先生には、学生指導も含めて、今後とも頑張ってくださいと思います。

- ◆ 今までに聞いたことない場での戦争のことだったので日本もずるかったのだなあと思いました。この場でのことも、もっと早く多くの人に知らせるべきだったのだと改めて思いました。

遠藤さんは、戦場を体験してきた人々の場に苦勞して関わって力をつけて来たのだと思います。それは貴重です。

これからも色々な場で語って欲しいです。

遠藤さんの著書『『戦場体験』を受けつぐということ ビルマルルート 拉孟全滅戦の生存者を尋ね歩いて』は高い本ですので、買いそびれた方は持っている方に借りて読んで欲しいと思います。私は持っています。(新井竹子)

- ◆ 女性視点の慰安婦の話が興味深かった。日本軍兵士は彼女たちを「戦友」と思っていたが、彼女たちは生きるために日本兵に尽くしたという話は、男性にはわからない面だと思う。

直接戦争で受けた身体の傷よりも、戦争の心の傷(P T S D)の深さを改めて知った。

講演を聞くことができ良かったです。この機会を作ってくれてありがとうございます。

- ◆ 歴史は繰り返す、しかしまた、戦争が起こるとしたら、かつての戦争とは違う現象が見えるだろう。それは、どんな形を取るであろう？ 考えなければなるまい。それは最終戦争であろうか？

(西坂戸 高橋正宏)

- ◆ 1. 平和教育の反転
被害→加害→抵抗→オルタネイティブ(反転)→加害事実への非難・攻撃→ヘイトスピーチ
- 2. この会場に50代以下がないこと
(注：実際には30代も参加していました)
- 3. 国会前での若者の参加
but 学園に帰ると話せない→どう考える？
- 4. 上記の3と合わせて、日大のタックルした選手は、戦中の神風攻撃を命じられ実行した日本兵に重なる。

5. クラブ、クラス、会社、行政

それぞれの組織と個人の在り方、コミュニケーションの在り方の検討が必要。(溝端町 若菜俊文)

- ◆ 知らない(事実・真実)ことが第一だと思う。何らかの方法(いくつもあろうと思うが)を具体的に行な

うことが必要ではないでしょうか。

- ◆ 自分の実体験としては1970年、ラングーンのスッタゴン寺院を訪ねた時、現地の方が「軍票」を持って来て、「日本人ならこれを通用する金に換えてくれ」と言われたことでした。

戦争経験のない自分にとっては非常にショックでした。軍票で現地の人を騙して、戦争が終わったら流通貨幣に換えられると言っていたことは、今の若い人には理解できないことです。

戦争体験はなくても戦争を知ることの重要性を、もっと多くの人に知ってもらいたいと思っています。(清水町 平田)

「オール沖縄」デニーさん勝利

西坂戸 大山 茂

名護市辺野古の新基地を許さないという声は、沖縄の人たちだけでなく、世界中の平和を願う人々の一致した願いです。翁長前知事の遺志を引き継いで立候補の決意をした玉城デニーさんの当選をめざすボランティア支援として、告示日前後から2週間にわたり、沖縄へ行ってきました。

活動した場所は、沖縄県庁や国際通りを抱えた文字通り沖縄の中心地にある那覇市議の事務所でした。そこは全国各地から結集したボランティアでにぎわっていました。商店街地域のヘチラシ配りが主な役割でしたが、外人観光客でにぎわう国際通りの商店主の方々は「デニーさんですね。応援してるよ」と元気い返事が多くあり、むしろこちらが励まされました。

国際通りが外人観光客でにぎわっているのは、翁長前知事が観光誘致に尽力していたことを知っている商店主の方々は、辺野古に新基地ができると観光客が激減するという不安感がデニーさん応援のマインドつくりにつながっていることを肌で感じました。

一日だけ糸満市での宣伝活動に参加、そのおりに玉城デニーの候補者隊に出会い、デニーさんと握手をする機会に巡り合いました。デニーさんの手は汗で濡れていましたが、その手で多くの県民の方と握手をしているのでしょ。熱気を強く感じました。

雰囲気はよいものの、自民公明勢力はデニーさんの当選を阻もうと猛烈な組織戦を展開してきました。そうした中で創価学会の三色旗をかかげてデニーさんの出発式に参加している勇氣ある方に間近で出逢いました。その方のことがマスコミ報道されてから創価学会に動揺が広がったようです。

終盤では「オール沖縄」勢力が強い団結力を発揮し、選挙結果は相手候補に8万票の大差をつけて当選。この歴史的闘いに直接参加できたことはとても嬉しい限りです。

今後の運営委員会(会員なら誰でも参加できます)

11月22日、12月27日、1月24日(第4木曜日10時~12時)
会場は坂戸市役所に隣接した勤労女性センター談話室